津波への警戒心薄かった地域住民

福島県いわき市消防団
第２支団第１分団　庶務部長　**吉田　一弥**（52歳）
消防団歴　11年（会社経営）

いわき市の概要と被災状況

いわき市は、福島県の南東端、茨城県と境を接する、広大な面積を持つまちで、東は太平洋に面しているため、寒暖の差が比較的少なく、温暖な気候に恵まれた地域である。人口は、33万2,686人（平成24年３月１日現在）と東北地方では仙台市に次ぐ人口を擁している。面積は1,231.35㎢で、約60㎞に及ぶ海岸線に点在する海水浴場や日本三古泉の一つに数えられる「いわき湯本温泉郷」を中心とした観光サービス業などを展開している。

いわき市消防団は、７支団47分団327班3,744名（平成23年４月１日現在）で構成されている。第２支団は、407名、消防ポンプ自動車５台、小型動力ポンプ積載車35台で構成され、市の北東部の位置する四倉・久ノ浜・大久地区を管轄としている。

いわき市全体では、東日本大震災による人的被害は死者310人、行方不明者37人、負傷者４人、住家被害は全壊7,710棟、半壊３万798棟となった。

３日続きの警報があだに

３月11日の大地震が起きた時、私は仕事の関係で小名浜港近くに出向いていた。これほどの揺れは起震車で体験しただけで、実際に経験したことのない激しい揺れだった。屋根瓦がバラバラと落ちたり塀が倒れたりする様子が目に入った。この辺りは震度６弱だった。

中之作漁港（国土地理院）

「すぐに戻らなければ」と、車を走らせていわき市中之作にある第１分団第４班の詰所にたどり着いた。途中、道路が陥没している箇所もあった。地震の被害はかなり大きいと感じた。詰所では仲間の団員が、すでにポンプ車を出動させる準備を整えていた。それを確かめると自宅に戻り、隣近所の十数戸に避難を呼びかけた。

「大きな余震が来るかもしれません。建物の中は危険なので、すぐに外へ。がけ崩れが起きそうな場所には近づかず、瓦が落ちてくる心配のない広い場所に逃げてください。津波が来るかもしれないから海にも近づかないように」

注意事項を細かく伝えると、再び詰所に戻った。自分も含め、８名の団員が勢ぞろいした。詰所の隣にある区民館にいた人が「テレビが大津波

江名郵便局周辺の浸水状況

警報の情報を流していた」と知らせてくれた。「急がなくては」と、私は団員のうち２名をポンプ車に同乗させて出動。中之作の港周辺を重点的に一回りして「大津波が来るから、すぐに避難してください」と、知らせて回った。倒れたブロック塀で一部が塞がれた道路もあった。詰所に待機させた５名の分団員も、それぞれに住民たちが円滑に避難できるように誘導していた。自分たちも詰所周辺に引き返して「海に近づかないように、高い所に逃げてください」と呼びかけながら、走行中の車の誘導に当たったが、受け手側に緊迫感が伝わらないことにいささか苛立ちを感じた。

中之作地区は海岸沿いの湾岸道路が緩やかな登り坂になっている市道につながり、その両側に住宅地が広がっている。その市道をみんな、ゆっくり歩いていた。自分たちの呼び掛けが決して大げさではないことを分かってもらいたくて、「命が惜しかったら、急いで走れ」と、大きな声で叫んだ。ただ、９日、10日にも地震があり、津波警報も出ていたが、海面にこれといった変化は観察されなかった。その時もポンプ車で津波の広報に回っており、住民たちの間には「またか」という思いがあったに違いない。

日没まで続けた津波監視

３月９日、10日の地震発生後に、私たちは警報を伝えて回った後、海の様子を注意深く見守ったが変化が見られず、２時間ほどで警戒態勢を自発的に解いた。警報解除の通知はどこからも伝わってこなかった。だから、解除の広報はしていなかった。そのことが住民たちの緊迫感を削ぐ一因になったのではないか、と後になって反省した。

車道には、たまたまこの地区を通りかかった車も混じっている。そうした他地域の人たちをも混乱のないように誘導してやらなければならない。住宅地を縫って走る５本の登り坂道路ごとに団員を配置。混乱なく、避難者を誘導した。それぞれの道路には緊急の避難場所になるような空き地があり、そこにはそれぞれ20人～30人ずつが集まり、海の様子を見てカメラやビデオで撮影している人もいた。緊急避難した人の２割ほどは地元以外の人たちだった。

消防団員たちは手分けして避難場所に集まった人たちの保護に当たった。私は詰所の近くで津波の到達を監視した。第１波は港の岸壁に乗り上げたが、ひたひたと洗う程度だった。第２波は港湾道路を完全に乗り越えて６ｍ～７ｍ奥の市道のすぐ脇まで達していた。港湾道路と市道の高低差は約２ｍ。その後に発生した第３波が最大で市道をも乗り越えた。さらに第４波、第５波が押し寄せたが、港湾道路が水浸しになるくらいで収まった。津波があと50㎝高かったら、詰所も床下浸水の被害を受けるところだった。

市道をさらに上って行くと県道につながる。津波の心配はほぼなくなったと判断して、市道周辺に一時避難した人たちに海には決して近づかず県

浸水した沿岸部

道方向へ抜けるように促して避難場所からの移動を指示した。その後も万一に備えて、数人の消防団員が交代で暗くなるまで海の監視を続けた。

第１分団第４班の管内では、港湾道路と市道の間に建っていた50戸ほどが床上・床下の浸水被害に遭ったが、流失した建物はなかった。小名浜港界隈の地区のうち中之作は複数の防波堤のおかげで跳ね返った波同士がぶつかり合い、津波の直接の勢いを削いでくれた。しかし、隣接する永崎、折戸辺りの地域は津波に直撃されて大きな被害が出た。流失、損壊も含めて家屋の被害は７割に及んだ。残った３割も全くの無傷は少なく、床上・床下浸水の被害を受けている。

臨時の避難所にした区民館の瓦もかなり落ちていたので、消防団員たちが地区の役員とともにブルーシートを被せた。区民館近くの中山医院がデイサービスで預かっていた介護が必要な高齢者10人も看護師が付き添って区民館に避難してきた。区民館の避難者は全部で50人ほどになった。管轄区域内では、江名中学校と真福寺別院も避難所として指定されている。江名中学校の体育館には、怪我人もいて、中山医院が治療にあたってくれた。治療には照明も必要だろうと判断して、区民館に保管してあった発電機を体育館に運び込んだ。発電機は、照明とともに暖房用にも利用してもらった。真福寺別院にも20人ほどが避難していたので、暖房機を届けた。

原発事故の影に泣く漁港

消防団員は、交代で一時帰宅しながらも、明け方まで全員が緊急事態に備えて待機の態勢をとり続けた。３月12日になって、新たな恐怖が生じた。東京電力㈱福島第一原子力発電所の事故である。どう対応するかを消防本部と相談した。安全が確認できるまでは、とりあえず福島第一原発から少しでも遠くへ離れることが最善策だということになった。事情が許す限り、いわき市よりも南か西の方角のできるだけ遠くへ退避するように呼びかけた。とくに放射線の影響を受けやすい子どものいる家族は避難するように説得した。それに応じて８割ほどの住民が一時的に地元を離れた。

見えない不安に脅えながらも次の日には帰宅した人、１週間後、１か月後に帰宅した人といった具合で退避後の行動はそれぞれだったが、７月末までに全家族が自宅に戻っている。しかし、消防団が発した自主的退避勧告は間違っていなかったと確信している。

地元の中之作港はカツオ漁港として知られている。だが、大きな被害を受けなかったのに、原発事故の風評被害でほとんど水揚げのない状態が続いている。実際には小笠原とか房総沖で漁獲したものなのに、中之作港のカツオということで買い手がつかない。隣接する小名浜港でも同じ状況が続いている。理不尽な話である。中之作はウニの貝焼きも名物だが、これも利用者から敬遠されて、漁協関係者も平成23年中の営業再開を断念した。

津波で港内に沈んだ車両や瓦礫もすっかり撤去され、港としての機能は完全に回復しているのに、中之作港は開店休業状態になっている。

電気は早い段階で復旧し、各家庭の冷蔵庫にあった食品は無駄にせず利用できた。米の買い置きもある。干物や保存食もある。区域内には震災で破損した冷凍倉庫があり、中に貯蔵してあるかまぼこなどの食糧を利用してほしいと所有者から申し出があり、当面は食べ物に困ることはなかった。

生活用水探しに走り回る

しかし、生活水の確保では苦労した。この地域では大震災発生で断水後、どこからも全く給水のない事態が１週間も続いた。自宅は難を逃れたものの、実際には生活ができない状態だった。消防団員たちは地区の役員にも協力してもらい、井戸水や水道水が出ているところを周辺地域にまで範囲を広げて探し歩いた。各戸当たり１日５ℓほど

給水活動

被災した消防車

の水をなんとか分けてもらい、断水した家庭に配って回った。

その後、地元の浄水場で直接に取水できるという情報が入り、分団員たちが２ｔ車に大きなポリタンクを積んで水くみに日参した。こうした事情を知った第２支団本部及び他の分団からも給水の応援が入り、生活水確保の闘いはひと一息つけた。市役所から給水してもらえるようになったのは、大地震発生から２、３週間ほど経ってからだった。

自衛隊の救援活動による給水は、あくまで避難所が対象である。自宅でなんとか生活できるような場合は、住民が自力で水を確保しなければならず、消防団が支援せざるをえなかった。それでも住民たちの水不足状態が解消されるまでには、しばらくの日時がかかった。そのうちに避難所が最優先だった自衛隊の給水活動にもゆとりが出てきて、スーパー前でも受け取れるようになり、水に対する不安が薄らいでいった。

この地域で断水した水道が復旧したのは４月10日、ちょうど１か月かかった。それも半分の地域だけ。翌日には全域で復旧するかなと期待していたら、４月11日に震度５の地震が発生。再び、断水になった。完全復旧は、それから１週間後となった。

地元住民を守るために

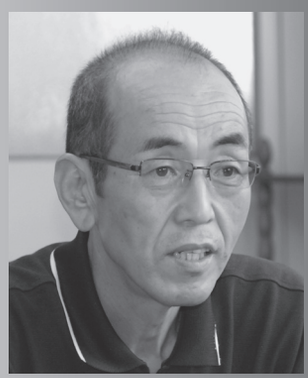
東日本大震災に絡んで、水の確保や原発事故後の対応など消防団活動のマニュアルには明記されていない状況にいくつも遭遇した。その都度、地元住民の生命・財産を守るという大前提に合わせて自主判断し行動した。

消防団として所有していた10台の消防車のうち４台は津波の被害で使えなくなり、その分だけ地元住民に対する支援活動や広報活動などが制限されたことは否めない。

自分が経営している非破壊検査会社も、受注の３割を占めていた原発所在区域からの仕事はゼロとなった。いわき市内の仕事もほとんどなくなり、今は従来の３割しか仕事量がなく、７割の従業員には辞めてもらっている。

いわき市消防団第２支団第１分団は、吉田伸分団長含めて総勢は16人。そのうち、自営業は４人、あとは会社勤めという、いわゆる都市型の消防団組織である。今回は、サラリーマン団員も大地震発生から１週間は勤務先の会社が臨時休業状態だったので、一番忙しい時期はほぼ全員が消防団活動に携わることができた。

震災後は救援物資の配布作業に明け暮れた



福島県いわき市消防団
第２支団第３分団　分団長　**石井　宮喜**（52歳）
消防団歴　27年（自営業）

指定避難所の対応に課題

３月11日の激しい揺れに襲われた時は、いわき市小名浜消防署の近くで開いている自分の生花店にいた。店内の花桶や花立てが倒れてむちゃくちゃになったが、それどころではなかった。外に飛び出し、店の横に止めてあった車につかまった。それでも、とても立ってはいられず、思わずしゃがみ込んだ。

これは、ただ事ではないぞ。そう思い、出勤していた４人の従業員には「海寄りの道路は絶対に通るな」と注意して、すぐに帰宅させた。その後、店からほど近い所にある自宅の様子を見に走った。あちこちで屋根瓦が落ちて道路に散乱していた。通行の障害になりそうな残骸だけは片付けてから、周辺の住民たちに急いで避難するよう、声を限りに呼びかけて回った。停電にはならなかったので、テレビが報じる津波警報を頼りに、あわただしく動く住民たちの姿が確認できた。

消防団詰所に着いてみると、ポンプ車はすでに別の団員が運転して管内の巡回を開始していた。そこで、避難所に指定されている小名浜第二小学校の様子を確かめに向かった。初めのうちは校舎内に入れてもらえたのに、途中から「ここは一時避難所だから」という理由で校舎から締め出されてしまった。緊急時だからこその避難所なのに、課題の残る対応だった。避難者たちは不安そうな表情で校庭に集まっていた。長期化する場合の避難所は、小名浜第一中学校だということを伝えると、避難者たちが一斉に小名浜中学校を目指して移動を始めた。そのため、中学校に通じる道路が車で大渋滞になってしまった。

私が小名浜第二小学校に着いた時はまだ校舎内

救援物資の積込み

地域住民へ救援物資を届ける

港湾部の被害状況

打ち上げられた漁船

に入れたので、３階まで上がり、津波の様子を監視した。視野に入る限りでは、自動車のタイヤが半分くらい水没する程度で収まっていた。津波警報が注意報に変わったことで、避難していた住民たちはそれぞれに自宅に戻り始めた。詰所に引き返すと、ポンプ車も戻っていた。大きな被害の報告は届いていなかったが、念のためにポンプ車で管内をもう一度巡回した。異常がないことを確認した後で、その日は警戒作業を解いた。３月12日も、ポンプ車で管内の状況把握のために巡回した。

市から「雨に注意」と通達

３月15日には、第２支団第１～第６分団の分団長会議が開かれた。地震直後に断水して住民たちが生活水の確保に困っていることが緊急課題になった。地元の浄水場から水をタンクに入れてそれぞれの管内に配って回ろう、ということになった。小回りの利く軽トラックに水のタンクを搭載して管内に届けることにした。そこで軽トラックの所有者に連絡して協力してもらった。ガソリンの搬入にも不安があったので、燃料消費が少ない軽トラックの活用は良い選択であったと思っている。断水は地域によって、１週間から１か月余り続いた。

自衛隊の給水車が比較的早くから活動を始めてくれたので、消防団による給水活動はそれほど長期には及ばなかった。しかし、震災後しばらくの間は物流が機能不全になり、商品が不足した商店は開店休業状態で住民の日常生活に支障が出始めた。そのため、自衛隊が市の対策本部から小名浜消防署まで搬送してくれた食糧などの救援物資を避難所に届ける細かい作業を私たち消防団が請け負った。物資運びは、３月16日から４月26日までの40日間ほど続けた。その間の生花店の仕事は息子にすべて任せ放しだった。

物資の配布作業に当たっては、市から「雨に注意せよ」という通達があった。福島第一原発事故で放射能汚染が心配されるから、ということだった。空模様を見上げ、晴れ間を探しながら、車を運転した。雨雲を避けながらの作業で管内全域を回るのに、普段の倍以上の時間がかかった。といって、公平に配布しなければならないので、雨を全く避けるというわけにもいかなかった。住民から「ありがとうございます。明日も来ていただけるのですね」と、感謝と期待の声をかけられた。それを聞いたら、雨の日はやめようという気持ちにはなれなかった。

第３分団の管内では、住宅に対する津波の被害は少なかった。全壊した家屋もあったが、津波ではなく地震が原因だった。しかし、海岸沿いに建設された多くの工場や倉庫では、津波の被害が大きかった。それらの建築物や構造物が津波の勢いを削いで、結果的に住宅地への被害が食い止められたようだ。しかし、打ち上げられた小さな漁船が道路を塞いでいる箇所もあり驚いた。

ポンプ車もろとも濁流に揉まれて

福島県いわき市消防団
第７支団　副支団長　**渡部　喜和**（63歳）
消防団歴　40年（木工業）

じわじわ迫るどす黒い波

３月11日の大地震発生時、木工業を営む私は、建具を作っている最中だった。動くこともできないほどの激しい揺れだった。家族には「孫たちを連れて中学校へ逃げろ」と言い、管内の見回りと注意を呼びかける広報活動のために自宅脇の頓所に止めてあるポンプ車に向かった。

２日前の３月９日にも地震があり、津波注意報も出たが、この時は海面上昇もたいしたことなく鎮まっていた。だが、今度は違うぞ、と直感した。

激しい揺れはいったん止まったが、その後にしつこいくらいに揺れが長く続いた。近くの寺の門柱が２本倒れた。本堂も倒壊寸前のような揺れ方だった。

「大きな津波が来るぞ。早く逃げてくれ」

一人でポンプ車に乗り込むと、スピーカーから避難の呼びかけを繰り返し、流し続けた。運転席脇の窓は開けて、外の様子にも気を配った。ＪＲ常磐線の電車は止まり、踏切の遮断機は下りたままの状態になっていた。国道６号線は、すでに避難する車が数珠つなぎになっている。

管内への呼びかけ活動をひと通り終えて、屯所へ戻るために高台の江之綱地区から道路を下り始めたところで、前方にどす黒い波がじわじわと迫ってくる様子が視野に入った。最大規模の津波になった第２波だった。後で知ったのだが、第１波は堤防を越えてはいなかった。

それから２分ほど経っただろうか。私は、ポンプ車ごと、荒れ狂う波に飲み込まれていた。窓を開けていたため、車内は水でいっぱいになった。あっという間の出来事だった。気がついた時は、ポンプ車の運転席の開けてあった窓から抜け出る水とともに勢いよく車外へ放り出されていた。

瓦礫の中から助け呼ぶ声

水中でもがくうちに、電柱に身体が引っ掛かった。無我夢中でその電柱にしがみつき、引き波が収まるのをじっとこらえた。この電柱は自宅前のものだった。見回すと、濁流は自宅の門柱をなぎ倒し、寺や墓地、街並みを根こそぎ飲み込むような勢いで押し進んでいた。住宅が、車が、何もかもが威圧するような濁流に押し流されていく。その中には炎を上げながら流れていく建物もあった。何かが発火して、火災が起きたらしい。

身内が濁流に引き込まれていくのを、ただ見ているしかなかった人もいた。襲いかかる津波の様子をビデオに収めている最中に、自分も巻き込まれた消防団員もいた。この消防団員は、しばらく流れに身を任せているうちに灌木の林に引っ掛かり、かろうじて助かった。その団員は海抜10mほどの土地に建っている自宅にいたのだが、もろに津波の直撃を受け、妹は犠牲になった。

引き波が収まるのを待って、私は電柱から降りた。日頃から身についた慣習で、まず出火場所へ、と気は焦る。だが、足元は瓦礫が折り重なって歩こうにも足の踏み場もない。瓦礫を乗り越えながら進むうちに、瓦礫に挟まった人影が見えた。近づいて助け出そうとしたが、すでに意識はなかった。引き出そうとしたら、すぐそばの倒壊した住居の中から助けを求める声が聞こえてきた。

消火活動よりも、遺体の収容よりも、まずは人命救助が先だ。そう決断すると、私は声のする方へ向かった。周辺で救助活動に動いている消防署員と消防団員が目に入った。その時は、遺体の扱いに立ち会ってほしい警察官の姿は、見当たらなかった。いわき市平消防署四倉分署長は、広報に駆けずり回っていた。

ありったけの衣類をかき集めて

被災した人たちが、ＪＲ久ノ浜駅に集まっていた。血を流している人、ぐったりしている人、寒さで震えている人。駅員がストーブを焚いてくれた。しかし、夜になって何時ころだったか定かではなかったが、駅員が「駅舎を閉鎖するので出て行ってほしい」と伝えに来た。

規則であることがわかってはいるが、この非常時だ。「なんとかならないか、薄情だなあ」とは思いつつも、それ以上の無理強いはできない。仕方がないので避難者たちを説得し、久ノ浜中学校に移動してもらった。幸い、そこには医師もいて病人やけが人の手当てにあたってくれていた。

停電、断水で、避難所では水洗トイレは使えなくなった。我慢のできない年寄りは、ベランダで用を足していた。見て見ぬふりをするより仕方がなかった。夜はまだ寒さが厳しく、避難所に向かう年寄りには特に冷えないようにありったけの衣類をかき集めてもらって持参させた。

私は、避難誘導や救出活動に専念し、自分自身が津波をかぶってずぶぬれのまま活動を続けていたことさえ気づかなかった。消防団員たちは災害発生以来、何も食べず水も飲まずに活動を続けていた。すぐに手に入る食料は何もない。避難所に行ったら、何かあるかもしれない。といって、消防団員用にあらかじめ準備されたものがあるわけではない。乾パンがいくらか残っているのを譲ってもらって、消防団員たちで分け合った。だが、乾パンを呑み込む水もない。瓦礫の間に散乱していたペットボトルのうち、容器が壊れていないものを拾い集めて飲料にした。これだけで再び、行方不明者の捜索・救出、遺体の収容や消火といった活動に戻っていった。

貴重なおにぎり１個

やがて夜が明け、空が白み始めるころに、団員たちは空腹感を訴えた。私は、避難所の久ノ浜中学校へ向かい、炊き出しのおにぎりを団員たちのために分けてもらいたいと申し出た。１人１個ずつではあったが、団員たちの当座の飢えは凌げた。救援物資もまだ届かず、難を逃れた家々からコメを持ち寄って炊き出した貴重なおにぎりだった。ありがたかった。２階部分が残った自宅では、妻が避難生活に役立てられるものを避難所に運び込み、救援活動に協力した。

被災２日目の３月12日は、日が暮れるまで、握り飯１個で働き続けた。12日の夜に消防団活動を止めて、いったん解散した。その夜は、妻の親戚を頼って一泊し、入浴して久しぶりに体を温めた。

混乱に乗じた盗難事件も

翌朝、行動を共にした息子とともに自宅にとんぼ返りし、前日に発見しながら収容できていなかった２遺体を残した場所へ向かった。警察官が安置所に搬送してくれたことを確認して、ホッとした。

その後は、鎮火し切れていない火災の消火と、

瓦礫の撤去に集中した。散乱した瓦礫で市街地は爆撃を受けたようになっており、何をするにも作業の妨げになる。なんとか、人が動きやすい状態まで整理した。津波は、国道６号のところまで瓦礫を押し込んでいた。

すると今度は移動しやすくなった環境に乗じて、空き巣や盗難事件が横行するようになった。消防団活動に協力してくれる人たちがいる一方で、悪事を働く者がいることにぶつけようのない憤りを感じた。私の家からも、壊れずに済んだ２階にあったテレビやゲーム機などをごっそり盗まれた。私の家ばかりではない。住居は流されずに済んだが、停電と断水で日常生活ができずに一時的に避難所暮らしをしている留守宅は、軒並み被害に遭っている。

日を追って増える犠牲者

３月13日にとりあえず、実家で一息つこうと連絡をした。しかし、実家のあるいわき市北部の郊外では地震・津波の被害に加えて、一部地域には福島第一原発事故の影響で自主避難指示が出ており、里帰りできないことがわかった。

３月14日以降は、行方不明者の捜索が中心になった。３月22日に４人、23日に７人、24、25日には２人ずつ、26日に３人、いずれも遺体で発見した。行方不明者の数は当初33人だったのが、日を追って増え、27日には43人に増えていた。

第７支団は消防団本部からの要請を受けて３月28日には原発事故による避難指示地域内で行方不明者の救出や捜索活動を応援した。管轄外の地域のうえに、放射能から身体を守る防護服を着用しての作業だったので緊張した。行方不明者２人を遺体で発見したが、このうち、１人は元消防団員だった。

３月29日からは再び、地元での活動に復帰した。力を注いだのは、盗難防止だった。第７支団では、自分たちのものも含めて６台のポンプ車が津波にさらわれた。しかたなく、隣接する消防団

消防団による避難指示地域内での捜索活動

から融通してもらった１台を運転して、管内を１名で巡回した。住み慣れた地元とはいえ、すっかり変わり果てて人影もない管内は不気味だった。護身用に座席の脇には木刀を用意した。住民たちの有志が自警団を結成して見回りに当たり始めたと聞き、夜間の巡回を２日間でやめることにした。

建物が消えただけではない。地形も変わった。揺すぶられ、津波にかき回された地盤は沈下して波打ち際が大きく後退してしまったのだ。地震直後はポンプ車でいつものように走れた道路が、津波の後は瓦礫に塞がれて身動きが取れなくなった。津波の威力の凄まじさを思い知らされた。私の体感では、津波を見てから、２分ほどで巻き込まれたのだ。

津波が見えてから逃げたのでは遅いのだ、ということを教訓として学んだ。多くの犠牲者が出たが、地震の発生があと１時間遅かったら、もっと悲惨な状況になったに違いない。児童生徒たちが下校途中に津波に巻き込まれる恐れが懸念されたからだ。今回は幼児も２人、犠牲になったが、いずれも幼稚園に通園する年齢にも達していなかった。

津波から逃れようと孫を軽乗用車に乗せた後、飼い犬のことが気になって家に戻ったところで津波に巻き込まれて犠牲になった祖母もいた。孫は軽自動車に乗ったまま津波に浮いて助かり、祖母は後になって焼け跡の中から遺体で見つかった。生と死の分かれ目は紙一重だということだ。